

〔書評〕

瀧本和成著 『森鷗外 現代小説の世界』

松村 洋

著者はさきに「森鷗外とドイツ」(『作家の世界体験』所収、一九九四年、世界思想社)で「独逸日記」のモチーフと、その書きなおしの関連を追究し、「鷗外文学の受容―戦時下の鷗外像」(『森鷗外を学ぶ人のために』所収、一九九四年、世界思想社)では昭和十年代の鷗外論の隆盛の背景を探った。一貫して鷗外と取り組んで来た著者が、これまでに発表した、鷗外の明治四十年代の現代小説に関する論考七篇と随想に関する論考一篇をまとめ、これに「序説」を加えたのが本書である。

明治四十年代の鷗外は「豊熟の時代」と呼ばれ、とくに小説では「文づかひ」以来十八年ぶりに「半日」を四十二年三月に発表してから、旺盛な活動を見せる。鷗外の文学は晩年の史伝類に傑作が多いというのが定説であるが、その中で四十年代の現代小説の分析に努めたのは「日露戦後社会の様々な歪みがこの時期に露呈してきており、そうした複雑な社会的問題意識の文学的究明が現代小説においてなされていると考えたからである」と著者は述

べている。鷗外の全体像を形成するためには欠かせない視角として評価したい。

順を追って見ていこう。まず「大発見」について「日本に自然主義の運動が興った頭初で(中略)さう云ふ史的背景の内に置いて読まなければ本当の面白味の生じて来ない作品」という評が紹介されている。鷗外の現代小説には、こういうのが多くて困る。「大発見」など、その代表的なもので、発表からわずか八年後にこの評が出ていたのである。したがって今日では、こうした小説の背景にあるものを探るには、かなりの文学的知識がいる。たとえば自然主義をめぐる当時の作家たちの態度を知らないと、同じ評にある(自然主義にたいする)「骨を刺すやうな(中略)一流の皮肉」など、なかなか分からない。鷗外文学の敬遠される所以であろう。

しかし、文芸思潮を国家の文化を構成する重要な要素と考え、自分の期待する思潮の流れを醸成しようと、ひたすら努めたこと

ろに鷗外文学の意味があつたのであろうし、鷗外には、文学者としてと同時に高位の官吏として、一国の文化に責任をもたねばという意識が強かつたと思われる。これは鷗外に限らないが、明治期の一流の啓蒙家が抱いていた気負い、ないし責任意識は実に大きかつた。

してみると、自然主義と対決するためにこうした作品を発表し、そのために小説としては文壇人にかよく分らないものになり、まして年月が経つと、一般の読者にはいよいよ意味が分からなくなつてしまうことは、鷗外にとつては名著なことなのかも知れない。それにしても、鷗外は文業の全てが残っているからよい。正当な評価を受けることなく、痕跡すら消されかかっている啓蒙家がどれくらいいることだろうか。

どうも最初から脱線してしまつた気味がある。要するに、文学的知識がないと十分に鑑賞できないような作品を多く残したことは、鷗外が時代の文学的空氣と烈しく切り結んだことを証している。その切り結びを、著者はどう解き明かしてくれているか。

「大発見」はベルリンに留学した「僕」が日本のドイツ駐在公使に「衛生学を修めに来ました」と挨拶すると「人の前で鼻糞をほじる国民に衛生も何もあるものか」とどやしつけられ、欧羅巴人を見習えと教えられる。僕が欧羅巴人を観察し、彼等が鼻の奥がむずがゆくなつてくるとハンケチで鼻をかむのと、我々が鼻紙を使うのと、どちらが衛生的かと考えたりしているうち、遂に芝居の脚本で鼻をほじる場が出てくるのを「大発見」するという

筋書きである。汚らしいものを扱つたなどという印象が先に立つ。何かの風刺であろうと見当はつくけれども、発表当時、既にその寓意は文壇人にしか分からなかつたのではないか。

さて著者は冒頭にある「発見」「発明」の語の意味をめぐる感想に田山花袋への批判を見る。「欧羅巴人が鼻糞をほじるかどうか」などという瑣末なことに僕がこだわつたことも「平凡瑣々の中に意味深い事実を発見する」ことを主張した花袋への皮肉とされている。また、日本人に悪罵を投げつけた西洋崇拜者の青木周蔵公使をも風刺的に描いたのは、東西両洋の文化に立脚することを理想とする自分の立場に根底を置くものであつたと論じる。それによつて、従来「看過されてきた作品」であるこの小説が、小品ではあるが、かなり重要なメッセージを発信していることが示唆されている。

次に「金毘羅」は、主人公の小野翼博士が琴平に講演に行きながら金毘羅さんには詣でずに帰つた途端、二人の子供の急病に直面する。鷗外の愛児二人が百日咳から合併症を起こして、二男は亡くなり長女は辛うじて助かるというつらい体験を素材に使つており、鷗外にすれば力を入れた作品であろう。医師から見放された娘が牛肉と葱を所望し、博士は弱り切つた病人にはどうかと思われるようなその料理を食べさせてやる。娘は次第に回復し、奥さんは、金毘羅様に代参で祈祷してもらつており、そのおかげといよいよ信心を深める。

この小説に竹盛天雄氏は『迷信』の狂熱でもなく、自然科学

的な近代医学一辺倒でもない、『因襲』や『杓子定木』から解放された状況への（中略）合理的現実主義の姿勢」を見ているが、著者は、それだけでなく、奥さんの信心の描き方に鷗外のプラグマティズム的な認識があらわれているとする。そしてその認識は「一つの価値観を押し付けようとする社会・国家権力に対して批判精神となり得るものを包含している」と述べている。鷗外の内面を探索してゆく著者の努力の一端をここに読み取ることができ

る。

ところで、娘はどうせ助からないのだからと思ひ、いやがる湿布を、もうしないで下さいと看護婦に頼んだところ、娘の方から「してえ」と望み、「しないと直らないから」とはつきり言った。「博士夫婦ははつと思つた」。小説の中で、この辺は生彩がある。長女の容態をめぐる実際の経過には安楽死の問題が含まれており、それが筆の運びにリアリティーを与えている面もあるのだろう。湿布をしてと言うくんだりには、博士の方からは娘が回復してゆく分岐点としてとらえられているに過ぎないのかも知れないが、幼い者の生命力が近代医学による権威ある断定を覆してゆくところに感動的なものがある。この描写自体が近代科学への痛烈な風刺といえるのではないか。また、知が勝つて情の欠けた小野博士と素朴な幼な児の対比という面でも面白いのではないだろうか。

「里芋の芽と不動の目」は、鷗外にしては珍しく工場経営者を主人公にした小説である。ストライキの頻発など、労働問題が社会の関心と呼ぶ中で、わが国初の労働者保護法として工場法が制

定された。その法案作成に中央衛生会委員として鷗外自身が深くかかわった経験がここに反映されていることを諸家が説いている。立法化の過程で鷗外がどんな意見を述べたのかがはつきりしないのだが、たとえば竹盛氏は、主人公の心構えを、独善的な利己追求ではなく「結果的には利他的に作用する自律」をめざすものとし、職工の賃銀の決め方にも、高尚な理論にも目を配った上での合理主義が貫かれているとして、ここに鷗外の立場があると述べている。

著者はさらに踏み込んで、鷗外の日記などから、十六歳未満の男子と一般女子の労働時間を十二時間に制限した条項については、とくに鷗外の意見が強く反映されたものとしている。そして中村文雄氏が、政府の工場法制定の本音は社会主義者の勢力を削減し、また結核蔓延による兵士の調達を解消しようとすることにあったとして、官僚派の頂点にいる山県有朋の内意を鷗外が受けていたのではないかとみていることに対して、「鷗外は衛生学の専門家として、工場法案の不備を指摘したという見方ができる」と述べている。中村氏の立論へのやんわりした反論とみてよい。この工場法問題に限らず、所論を正面切つて申し述べるより、むしろ控え目に語るのが著者の姿勢のようである。手堅いのだろうが、もどかしい気がしないでもない。

「沈黙の塔」は、東京朝日新聞に十四回にわたって連載された「危険なる洋書」で多数の外国作家とともに日本の作家が悪意をもつてとりあげられ、鷗外の名も槍玉にあがったことを契機に、

それへの批判として執筆された。個人的な反駁にとどまらず、皮相的な言論取締りへの批判になっており、「大逆事件後の反動的な言論弾圧のなかで学問と芸術の重要性と自律性を訴える鷗外の意志表明であった」と著者は述べる。

たしかに「危険なる洋書」では鷗外は風俗を乱すものとして非難を受けているのだが、鷗外は風俗壊乱も安寧紊乱も一緒くたにする記者の論旨をいわば逆手にとつて、社会主義弾圧にも批判の矢を向けているのである。著者は、たとえば「軍医総監たる鷗外としてはこれが精一杯の批判であつたであらう」（生松敬三氏）といった論評より、もつと、このときの鷗外の態度を高く評価しているといつてよい。また、総監の頭職にあることが身をしばっていた反面、鷗外の内面においては、そのことが国家の文教政策に対する責任を意識させ、こうした意志表明をさせた面があるのではないか。その辺のところ、著者の教示を仰ぎたいものである。連載開始から完結まで四年かかった「雁」は、小説らしい結構がよく整っており、鷗外の作品の中では今日でもよく読まれる方であろう。古い風景画を見るような一種の懐かしい情緒が、この小説全体に漂っている。それは、三十年以上も前の明治十三年の本郷・上野・神田界限という形で、出来事のあつた時代と場所が語り手によつていわば額縁に入れられ、さらに山手と下町の境目に沿つてストーリーが展開してゆくという巧みな舞台設定によることを、著者の指摘で改めて気づかされた。

著者はここで、ヒロインお玉の自我意識の目覚めの過程と岡田

への恋情を観察し、偶然の小さな出来事のために、お玉が恋を打ち明ける機会を永久に失う顛末を検討する。

諸家がおおむねこの作品の主題を「近代日本における〈青春〉もしくは〈恋愛〉の不在」という視点から「恨み」「怨念」あるいは「寂しさ」と集約しているのに対して、著者は「近代日本の恋愛もしくは青春は、明治の現実においてそうした形でしか存在しなかつたのだと訴えているのではなからうか」と論じる。お玉は「そのような形での自我への覚醒と、またそこから踏みこじられてゆく他ない現実のありようとして、形象されている」ということになる。そして鷗外は現代小説において、社会に毅然として挑む生き方ではなく、といつて近代社会に呑み込まれてゆく悲惨な生活でもなく、「明治という時代のその非情な世界に身を晒しつつ、なお人間的なものを失わないものの存在」を描こうとしたのだと強調し、「そこに、現実としては困難な状況の下に、なおかつその存在を求めてやまない鷗外森林太郎の姿がみえてくる」と述べている。

ここまで来て、樂觀せず、悲観もせず、ひたすら人間的なものを求めてゆく鷗外の姿を、著者が、他の四十年代の現代小説にも濃淡の差はあつても、見出している、もしくは見出そうとしていることに気づかされるのである。それは新たな、そして豊かな鷗外像の形成へつながる道であらうと期待を持つことができる。

(和泉書院 一九九五年十月 二〇四ページ 二五七五円)

(まつむら・ひろし 四天王寺国際仏教大学教授)